

岩崎 純一 著

『岩崎純一全集』 第十一卷 「人文科学（一の一）」

西洋哲学、アブラハムの宗教および西洋史、西洋の地理

編纂、監修 岩崎純一学術研究所『岩崎純一全集』編纂局

巻頭言

本巻は、『岩崎純一全集』の第十一巻を成し、岩崎の言語の著作物のうち、西洋哲学、アブラハムの宗教（ユダヤ教、キリスト教、イスラム教）および西洋史、西洋の地理に関する述作を収める。

目次

巻頭言

第一編 ○歳〜十九歳

第二編 二十歳〜二十九歳

第一部

西洋哲学と現代日本社会と私

西洋哲学と現代日本社会と私

第一章 昨今の国際情勢と西洋哲学の役目

ニーチェ研究者の現状と第三のニーチェ哲学

飽和した西洋学術の打開欲求 絵画と音楽

量子論、宇宙論、不完全性定理

神保町

米国一強の終焉と中国の台頭時代における西洋哲学

黒人差別、白人至上主義、「イエローモンキー日本人」

西洋哲学観察史

多神教からフィロソフィーへ

太古の昔

哲学と科学

ギリシャの自然哲学と宇宙論

ソクラテス、プラトン、アリストテレス

キリスト教哲学の席巻

トマス・アキナスとスコラ哲学

デカルト

スピノザと汎神論

カント

ヘーゲルと歴史

フイヒテ、シェリング

コントと社会学

ショーペンハウアー、キルケゴール

フロイト、ユング

マルクス、エンゲルス

神から人へ

ニーチェ哲学の特殊性

ニーチェ精神とヒトラー

フッサール、ベルクソン

プラグマティズムと新宗教

ヴェーバーと資本主義

ラッセル、ホワイトヘッド

ヤスパース

ソシュール、ウイトゲンシュタイン

ハイデガーの存在論

サルトルとヒューマニズム

レヴィナス

メルロ＝ポンティ

レヴィ＝ストロース

ラカン、ガタリ、デリダ

フリーコーとエピステーメー

クリプキ

サンデル、バトラー

第二部 「生（せい）の哲学」

第三部 ビン・ラディンにとっての神「アッラー」

第四部 中村雄二郎

第五部 ニーチェ

第三編 三十歳～三十九歳

第一部 剣を持たずペンで書いてみるだけの私のイスラム観

第二部 「ISIS（イスラム国）」の呼称論争について思うこと

第四編 四十歳～四十九歳

第五編 五十歳～五十九歳

第六編 六十歳～六十九歳

第七編 七十歳以降

第八編 著作者の一部および著作者が岩崎純一であるもの

第九編 著作者が岩崎純一であるもの

第一編 〇歳〜十九歳

編纂中。収録を待たれよ。

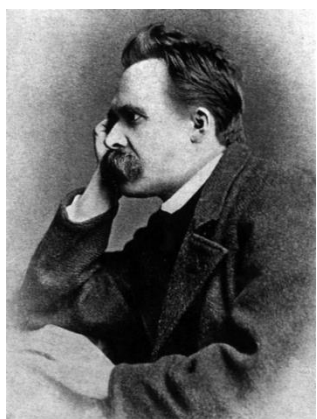
第二編 二十歳〜二十九歳

第一部

編纂中。収録を待たれよ。

第二部 「生（せい）の哲学」

二〇一〇年十二月二十一日 起筆、擱筆、公開



≪フリードリヒ・ニーチェ≫ Photographer Gustav Schultze,

Naumburg, taken early September 1882. Nietzsche by Walter Kaufmann, Princeton Paperbacks, Fourth Edition.

先日掲載した精神病理学研究のページに出てくる「生の哲学」は、「なまのてつがく」ではなく、「せいのでつがく」という哲学用語です。つい使ってしまう、申し訳ないです。

このページをお読み下さった共感覚者の方々から、「岩崎さんの共感覚の語り方って、まさにナマの人生哲学ですね！」というご意見があったので、一応書いてみました。でも、不思議と的を射たご意見だと思えますし、何となくおっしゃりたいことは分かりますね。何だかほほえましいことですし、褒められると嬉しいのですが……。

しかし、学問としての哲学における「生の哲学」は、また違った意味を持っているのです。

私としては、「日本人の鬱や共感覚をこの生の哲学の観点から語る人がもつともいいと思うし、自分もその観点から語っていききたい」という内容を書いているわけです。難解ですみません。

「生の哲学」は、西洋では、最初は哲学ではなく、文学的エッセイとして現れました。次第に、反主知主義・反実証主義・反キリスト教・反機械論・反哲学といったイデオロギーとして確立し、やがて「生の哲学」自体が一つの哲学になった感がありますが、日本・東洋では、「生の哲学」的な思想というのは、ある意味で人間の実存の自然なあり方として、生活に密着した歴史を持ってきたと言えるでしょう。

事実、「科学もまた一つの宗教である」（科学が悪いと言っているのではない）、「仏教は宗教ではない」といった、僕が持っている考え方自体が、西洋の「生の哲学」者たちの主張するところと同じ洞察・立場に立っています。

ソクラテス以来ヘーゲルに至るまでの従来の西洋哲学では、「生の哲学」的な考え方のほうが異端であったわけです。「生の哲学」とは、本来は「反哲学」です。僕は、この考え方によって日本の鬱や共感を語るべきだという思いを持っている、ということを書いていくわけですね。

■ 「生の哲学」

● ウィキペディア

<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E7%94%9F%E3%81%AE%E5%93%B2%E5%AD%A6>

● 大辞泉

十九世紀後半から二十世紀初めにかけて、理性主義・主知主義・実証主義の哲学や唯物論などに反対し、生きている生、体験としての生の直接的把握を目ざしてヨーロッパで展開された一連の哲学的傾向。ショーペンハウアー・ニーチェを源流とし、デイルタイ・ジンメル・ベルクソンらによって代表される。

● 大辞林

実証主義や機械論などに対抗して、十九世紀中葉から起こった哲学的潮流の一。真実在を、知性では捉えられない非合理で根源的な生であるとし、生の直接的把握（解釈・直観）を意図する。ニーチェ・ショーペンハウアーに始まり、ベルクソン・デイルタイ・ジンメルなどがその代表。

第三部 ビン・ラディンにとっての神「アッラー」

二〇一一年五月五日 起筆、擱筆、公開

ウサマ・ビン・ラディンがついに殺害されたらしい。「ビン・ラディン的な思想は、表に出さないだけで、実は自分の中にもあると感じている日本の男性は、けっこういるのではないか？」などと、突如僕の言いたい結論を書いたら、不審に思われるかもしれないが、明日東京がテロ攻撃に遭い、僕とて死ぬ運命にあるかもしれないわけだし、感じたことは書けるうちに書いておきたいと思う。

実際に僕は、一部の日本人の内面にある鬱屈した感情が暴発しない理由は、単に「日本にはアッラー（アッラーフ）のような全知全能の唯一神を認める土壌がないから」だけであると思っている。

一言で言うと、僕にとつての関心事は、「ビン・ラディンにとってアッラーとは何であったか」、「人間の男一匹がそんなに夢中になれ

るものがあるのか」ということ。いや、そういう問いの答えは、自分の日常生活の中で用意してあるのかもしれないが、一応は改めてそういう問いを投げかけてみたい。そのような人生のテーマを僕にももたらしたテロリストが、ついにアメリカに殺された。

アメリカはビン・ラディンを暗号名でジェロニモと呼んだ。ジェロニモとは、アメリカ白人による一連のインディアン殺戮作戦（ナバホ族全滅作戦など）に抵抗したアパッチ戦争（対白人抵抗戦）で、最後まで抵抗したインディアン戦士の名前である。歴史に興味のある、インディアン好きな日本の男の子なら知っている、おなじみの戦士である。

ともかく、それはそれとして、ナバホ族やアパッチ族などの研究で確認されているところでは、アメリカは、インディアン（ネイティブ・アメリカン）を殺戮するときに、まずターゲットのインディアン部族A・Bのうち、Aを狭い土地に追い込んでおき、それが別のインディアン部族Bの勢力拡大のせいであるという話を作り、行き場のなくなったAの闘争心を鼓舞させてBに武器を与え、AにBを襲わせてBの力を吸っておき、今度はBを襲ったAを「略奪を繰り返す危険部族」と見なして全滅させ、さらに力を失っているBをも同時に全滅させるという方法を取っている。

インディアンを捕らえたあとに行われた処置は、アメリカ支配層の歪んだキリスト教観を如実に物語っていると思う。例えば、その部族の三分の一は殺し、三分の一は拷問・強姦などをし、残る三分の一はキリスト教に強制改宗させるといった方法が見られる。

不可思議だが、インディアン殲滅作戦（アメリカがやったことではなく）キリスト教がやったことだと暗に主張することを（避けるどころか）むしろ心がけているのが、アメリカの大陸征服の特徴であった。

「三位一体」ならぬ「三法一体」のこの方法を、厳密にはオバマ大統領や米軍も免れることはなかったと思う。イラク戦争で起こった事態は、過去と全く同じであった。肌の色の違うオバマ大統領が、すでに内面は白人に成りきって、あえて「ジェロニモ」と「イスラム教」という用語を同時に使って戦争を遂行し、勝利を宣言したことは、重大なことであると思う。この両用語がどのようにして有機的に結び付くかを考えてみたい。

冷戦、九・一一、イラク戦争という一連の動向において、アメリカ（及びそれに追従した日本）は、先のAをテロリスト（ビン・ラディンないしアルカイダ）、Bをソ連と位置付けたと言えるだろう。アルカイダは、元を辿れば、ソ連のアフガン侵攻に対抗するためにアメリカが作った組織で、ムジャーヒディーン（イスラム義勇兵）から成る傀儡テロ組織の拡大版であるけれども、大半の日本人の意識においては、Aにイスラム教という宗教への負のイメージが組み込まれてしまっている。だから、確かに日本人は、イスラム教自体を「放っておけば自らアルカイダのような武装組織を作り出す宗教」だと思いがちではあると思う。

しかし、アメリカがあるいはオバマ大統領やブッシュ大統領が、ビン・ラディンをかっつてのインディアン戦士ジェロニモと同一視し

てそう名付けたという事実は、奇しくも、アルカイダの原型の結成と重武装化がアメリカの尽力によってなされたという現実を、僕のような遠い日本の一若者にさえ簡単に思い出させてしまう。ただし、アメリカは、「日本人は、そんなことまで思い出す国民ではないだろう」と考えたと思う。

日本のマスメディアはビン・ラディンを「容疑者」と呼称・記載しているけれども、アメリカが若きムジャーヒディーンに武器を供与し、ビン・ラディンとアルカイダを利用していたことを、僕ら日本の若者は忘れるべきではないと思う。

自分にどのくらいの教養があるか、世界情勢を見る目がどのくらいあるか、こういうことは自分では分からないものだけでも、アメリカが正義で、ビン・ラディンが悪であったという分析は、少なくとも僕には本能的にも理性的にも受け入れがたい。

大川周明や井筒俊彦のような、僕が魅力を感じるイスラム研究の大家は、今後の日本に現れるだろうか。彼らイスラム専門家だけではないが、少なくとも彼らは（日本は東洋に属する）とのアイデンティティを主張する文脈で、「東洋」と「西洋」という用語を普通に使い、いわゆるイスラム教徒の中に東洋精神を見ていたと思う。

大東亜共栄圏構想は、目が覚めてみれば一部の軍部の誇大妄想であったにせよ、その最大版図は、日本民族（大和民族）・漢族・朝鮮族・満州族・蒙古族の他に回族（イスラム教徒）を含み、イスラム国家インドネシアを通り、さらにはサウジアラビアやエジプトに達し、ひとえに西洋列強のキリスト教圏を除いていた。

このことは、同じ人間としての心の問題の上では、「イスラム教義は東洋精神・東洋の実存に親和する」という認識が日本の教養人にはあったことを示している。大東亜共栄圏は、五族協和・王道楽土の満州国に組み込みきれないイスラム東洋精神を組み込むための理想主義的措置、という側面があったわけである。

特に井筒俊彦は、日本からイスラム世界を経由してギリシャをも含む東洋精神の構築を夢見ていた。大川周明も、「中国・朝鮮・東南アジアを征服すること」ではなく、「イスラム教を仲間に引き入れること」を念頭に置いていた。僕自身の中にも、なぜか「東洋」なる言葉の中にイスラムまでを含める意識は、井筒俊彦の『意識と本質』を読む前からあった。

むろん、このような直観においては、「西洋」とはほとんど「キリスト教世界」を意味するのだが、三島由紀夫が「カトリックは世界で最もエロティックな宗教であり、あの荘厳な雰囲気は大切なものだ」と述べたように、大川周明や井筒俊彦にとっても、実際の「敵」は、キリスト教自体と言うよりは、「西洋列強の帝国植民地主義」であり、「東洋人蔑視」であった。

ならば、どうして「西洋」という語に「キリスト教」の響きがあるかと言うに、「西洋人」自らが「西洋」や「欧米」や「ヨーロッパ」という語の中に「キリスト教」の響きを入れて言葉を発するからである。

このたびのイラク戦争でも、オバマ大統領が同じ方法を用いたのは印象的だった。オバマ大統領は、イラク戦争中も、「これは決して

イスラム教に対する戦争ではない」と念を押して述べ続けたが、ビン・ラディン殺害作戦成功の宣言の際にも同じコメントを発したのが放映された。

そんなコメントをあえて世界に向けて言わなければ良いところを、こうして暗黙のうちにアメリカ市民宗教型キリスト教の勝利を宣言するとともに（アメリカの共時的勝利）、さらにビン・ラディンを「ジェロニモ」と結び付けることで、過去のアメリカの大陸制覇の正当性の宣言（アメリカの通時的勝利）をも同時におこなうという、かなり凝りに凝った宣言の仕方をしている。

僕は別に英語が得意なわけではないが、オバマ大統領の英語に特徴的なのは、「神（God）」とは言っても「キリスト」とは言わないということである。これは、対内的にはユダヤ教徒に、対外的にはイスラム教徒に配慮したものだと思われるし、「市民宗教社会アメリカ」を安定的に作り上げていくためのレトリックだと思う。

ここで、僕の個人的なエピソードを書いてみたい。僕は官僚でも公務員でも何でもない、五足ぐらいのわらじを履いて生きる自由人だが、昨年から仕事の関係で、内閣府をはじめ官公庁の文書に触れる機会がある。

その中で、ユダヤ・キリスト・イスラム各一神教、すなわちいわゆるアブラハムの宗教の「神」と、天皇の現人神（アラヒトガミ）性としての「神」の違いを、ひしひしと感ずることが増えた。これは、官公庁の正式文書が元号で書かれていること、そして現在は一世一元制が採用されていること、という、いわば「天皇と神概念」

についての思考を戦後に停止した日本人の「ダブルスタンダード」が原因となって生じている問題であると思う。

これまでに目にした中で、日本政府及び官公庁の日本観について、最も強い不満と滑稽さを覚えたのは、「平成二〇〇〇年」などという記述であった。これは、ある官公庁において実際に交わされた書面の一部に記載されたものであるけれども、常識的に考えて、平成二〇〇〇年に今の天皇陛下が何歳になっておられるかを考えてみれば良い。

官公庁の文書や法令には、天皇陛下に、まるでアブラハムの宗教の言う唯一絶対永遠の命を強要する書式が見られる。

ところが、日本の天皇の伝統において、「永遠（えいえん・とわ）」「千歳（ちとせ）」でありうるのは、「万世一系」のことであって、天皇陛下個人の命、細胞や内臓などの生命活動ではない。天皇陛下御自身が後者の永遠を主張したこともない。

その天皇陛下個人の生命の限界のほうに元号を合わせることにしたのに、様々な文書を元号で書こうとしている。だから、平成300年とか平成二〇〇〇年という書き方が登場するのだが、これは、実際に政府機関から民間法人に対して「そのように書きなさい」と指示が下された実例である。

このような日本観においては、天皇が「人間宣言」をしようがしまいが、天皇の「現人神」性をむしろ両極から否定しうる。簡単に言うと、日本の官公庁は、天皇という存在を、ヤマトコトバが指す「カミ」とも、アブラハムの宗教的な「神」とも扱っておらず、新

種の神概念を作り出して問題を乗り切っており、なおかつ天皇を、まるで「聖書を身勝手に解釈して自分を神と同一視した歴史上のローマ教皇」のような存在として解釈していると言える。

立場は色々あるとは思いますが、もし「天皇は現人神である」と信じらるならば、つまり「天皇は人間の姿をした神である」と信じるならば、天皇の肉体は、アツラーと違って人間そのものなのだから、我々と同じく生老病死の運命にあるはずである。

もし天皇陛下に現人神性を認めて、尊崇の念を払うならば、次の二つの方法があると僕は思う。一つは、「平成二十三年十〇〇年」と書くこと。もう一つは、日本国の公文書をキリスト教圏の暦（グレゴリオ暦）である西暦で書き、これによって、天皇の持つ性質を三島由紀夫の言った「統治的天皇（政治的天皇）」と「祭祀的天皇（文化的天皇）」とに二元的に分けて、前者に西暦、後者に和暦を付帯させ、日本の公文書を天皇の持つ統治的権威（government）とのみ親和させることで、天皇の穀物神としての祭祀的権威を独立させて守ること。

これで、アメリカの主権国家観やキリスト教とは全く異なった天皇の位置付けが上手に保存されるのではないだろうか。

これが絶妙な形で実現されていたのが「日本化された律令制」の時代で、「行政・立法・司法など全ての統治的権威」は太政官が担うけれども、天皇の祭祀的権威をバックボーンとして動く神祇官に対して、太政官は口出しができないように独立させられていた。

しかし、現在では、官公庁の正式文書が一世一元制に縛られた元

号を採用しているから、逆に天皇は遺伝子操作でもどんな大手術をしてもななるべく長く生存し続けなければならないかのような記載になっている。そんな理不尽な現状は、天皇への不敬・冒瀆にはならないだろうか。

以上のことを、少し機会があったので官僚相手に指摘してみたら、サツと交わされて「若者なんだから、そんな難しいことを言わずに、国の言うことと法令に従うように」と言われた。しかし、僕にはこういうことが関心の対象なのである。こういう議論を停止して戦後を過ごしてきた日本のあり方を、個人でできる範囲で是正してみたいと思ってしまう。

時系列的には、ユダヤ教、キリスト教、イスラム教の順に誕生したのに、なぜユダヤ教は安定的な国家を持つことができず、イスラム教はもはやその宗教自体がテロリズムの温床と思われ、帝国植民地主義という概念はキリスト教とのみ親和・結託したのか。これは、僕個人にしてみれば、人格神というものをどうとらえるかにかかっていると感じられる。

僕は、シーア派やイスラム神秘主義については、自分の日本人観や日本観と親和するものとして分析したことがあるが、ともかくスンニ派だろうとも、イスラム教で最重要であるのは、「ありとあらゆる目に見えるもの（被造物）を神としない」ということである。

ところが、これは「あらゆるものをアツラーとしない」ということであって、ヤマトコトバとしての「カミ」としない、という意味ではない。だから、極端に言えば、「アツラー」を「神」と翻訳して

いる日本のイスラム書物は、ビン・ラディンどころか穏やかなムスリムにとつても悪書でありうる。

従来の日本の八百万の神をそのまま「神」、外来のアブラハムの宗教の「God」を「天主・天帝」と翻訳しかつての日本人は賢い。アッラーはアッラーであつて、「神」ではない。それを大川周明も井筒俊彦も分かつていた。アッラーは人格神とされるけれども、「アッラーは人格神か否か」という問いを立てたのはキリスト教で、アッラーの姿は今までもこれからも偶像化されない。

逆に言えば、イスラム教は、「汎神論」ならぬ「汎アッラー論」でありうるかもしれない。ムハンマドは、預言者・使徒・開祖・軍事指導者などとは呼ばれるけれども、「アッラー＝ムハンマド」ではないから、キリスト教のような「三位一体説」、「神とキリストの父子関係」といった概念もありえない。

むしろ、日本国民のほうが日常生活で宗教を考えなかつたり、世界情勢に無知であつたりするだけであつて、大川周明や井筒俊彦は、イスラム原理主義勢力や神秘主義勢力のアッラー観が日本人の汎神論者性と親和する可能性があることを見抜いている。

少なくとも、ビン・ラディンが「アッラー」と言ったとき、それは日本の官公庁にとつての「平成二〇〇〇年」的な間抜けな「神」ではなかつただろう。ビン・ラディンは、そんな間抜けな矛盾を許すような人間でなかつたということだけは、確かだろう。ビン・ラディンが背負っていた「アッラー」とは、そんなナマ易しいものはなかつただろう。

少なくとも、オバマ大統領が、自分がブッシュ大統領から継承した戦争行為の結末の正当性を担保したものを、市民宗教としてのキリスト教だと暗に主張した一方で、前教皇ヨハネ・パウロ二世がキリストの名を背負つてイラク戦争にノーと言つた以上、二つの別の宗教が同じキリストの名を冠していると思えない。

このうち、三島由紀夫の言う「世界で最もエロティックで荘厳な宗教たるカトリック」を一宗派に持つキリスト教が後者であるとすれば、ビン・ラディンが攻撃したのは前者のキリスト教であろう。ビン・ラディンにとつては、おそらく日本の天皇が現人神であろうともなからうとも、頓着しなかつたと思う。

日本の天皇の現人神性・祭祀的権威は、アッラーとはぶつからないものであり、ぶつかるかどうかという問い自体が存在しないかもしれない。天皇が現人神として担保していたものは超越的理念ではないが、教皇が担保しているのは超越的理念である。天皇が現人神であるかないかに一喜一憂するのは、むしろ今でもアメリカであり、平気で官公庁文書に「平成二〇〇〇年」と記述する日本の官僚や政治家であるかもしれない。

「先の大戦で日本が勝つたとしても、日本刀で戦つて勝つたのならまだしも、西洋の軍事技術を駆使したのだから、勝つてもほとんど喜べなかつたであろう」と三島由紀夫が述べたのと同じで、ビン・ラディンとテロリストたちは旅客機を使つて勝つたとしても、確かに喜べないのである。

そこに現代テロリズムの空しさがある。ただし、少なくとも僕に

とっては、ビン・ラディンの思想やイスラム原理主義がアメリカ市民宗教社会型キリスト教よりも横暴であると断言する勇氣は、ないのであった。

戦前及びバブル崩壊・湾岸戦争までの日本のイスラム研究家が、なぜ「日本の多神教的・東洋の実存は、アッラーとは親和するが、イエス・キリストとは親和しない」として、イスラムを「東洋」の版図に入れたか、肌で理解できる日本人は、今は多くはないと思う。私自身も理解できていないのだろうけれど。

第四部 中村雄二郎

二〇一一年六月十九日 起筆、攔筆、公開

■おすすめ著作

『共通感覚論』 『共通感覚』（著作集 第一期 V） 『感性の覚醒』
『哲学の現在』 『場所トポス』 『共振する世界』

日本の哲学者の中で、明確に「共通感覚」の語を用いて共感覚を「哲学した」のは、この人くらいだと思う。氏には『共通感覚論』という著書がある。

私は「我々現代人における共感覚の減衰は、デカルト的自我の発見に端を発する」という言い回しをよく使うが、本著の枠組みは、

私の考え方と同じベクトルを向いていると思う。

デカルトの言うコモン・センス（センス・コムニニス）は、元々「常識」という意味と「心身関連の場所」という意味を兼ね備えていた。ところが、デカルト以降「共通感覚」の分裂は進み、今では前者の意味こそが常識的な「常識」であり、後者は切り落とされていくというところに行き着く。

デカルト的自我による強硬な真理追求を批判して登場したヴィーコこそ、西洋近代の共感覚研究において私が肯定的に注目する人物であるが、ヴィーコのいわば「真理と事実の相互置換性」は、傍流に追いやられるしかなかった。

私は、「共感覚がある対象を認識するためには、共感覚が精神によつてすでに作られていなければならない」と考えているから、ヴィーコと私の共感覚的な認識論は、反デカルト的であると言えるのだと思う。

ところが、著者の中村雄二郎氏は、現在の生理学の言う「共感覚」を本著「共通感覚論」の中にうまく位置づけることができなかったとはつきり書いている。私としても、本著の「共通感覚」の歴史的分裂過程のとらえ方はほぼ完璧であると感ずるのに、「共感覚」への理解には少し疑問を持ってしまった。

日本の共感覚者で、もし哲学的思索に慣れている人がいるなら、この書を読めば、「共感覚を持たない哲学者が共感覚を論じると、どこで壁にぶつかるか」がありありと分かるから、読んでみるとよいと思う。

中村氏の「共通感覚論」は「共感覚論」ではありえなかったといふことなのかもしれない。それは、デカルト以前の「共通感覚」を物理的・実体的な脳局在説への反論として用いなかったからであると思う。

「共通感覚」自体が「共感覚」による認識でしかとらえられないといった、私が目指したいタイプの共感覚論の萌芽のようなものは、本著からはあまり感じられなかったが、それでも全体としては、氏の共通感覚哲学の方向性は正しいと思う。

第五部 ニーチェ

二〇一一年六月二十日 起筆、攔筆、公開

■おすすめ著作

『音楽の精神からのギリシア悲劇の誕生』 『反時代的考察』 『悦ばしき知識』 『ツアラトウストラはかく語りき』 『善悪の彼岸』 『道徳の系譜』 『力への意志』 『生成の無垢』

私がニーチェを初めて読んだのは18歳のときで、このときからすでに、「自分の共感覚を衰えさせずに今の社会を生き続けることができるか」というように、自分の知覚と現代社会との間にある齟齬を自覚的に哲学的問題として取り上げていたように思う。

最近また、巷でニーチェが流行しているようだが、これは自己の実存を脅かす脅威への対抗としてではなく、実利的問題の処理方法として読まれているようである。

例えば、「どんなに就職活動を頑張っても、内定取り消しに遭うこととはある」ことを社会から見せつけられた若者は、「不遇の永劫回帰」を徹底的に意識にのぼせながらもなお生きたニーチェに、簡単に共感する。もともと、私にもこの心境は分かるのである。

問題は、今の日本人のほとんどは、実利の問題が浮き彫りにならない限りニーチェ的であり得ない、という点ではないだろうか。このたび東日本大震災が起こり、再び自己の実存・根源的生命と実利の問題とがピタリと寄り添うことになった。しかし、それでも、「助け合い」や「絆」といった、初歩的な単語だけが独り歩きしている甘ったるい短期的なブームは、ニーチェの崇高な思想とは遠いところにあると感じられる。

戦後のほとんどの時期は、実利の喪失は実存感の喪失ではなかったし、そもそも高度経済成長のおかげで実利の喪失自体もあまりなかった。少なからぬ日本人が、実利の喪失への抵抗を実存感の喪失への抵抗無しに行うようになった。こうして、自己の実存感の喪失への不満無き実利の喪失への不満が完成を見たために、簡単に「キレる」（＝すぐに他人に腹を立てる）人間が増えた。

しかし、ニーチェという人は、それとは対極的な真の温かさを持つていた人であったと、私は感じている。

第三編 三十歳〜三十九歳

第一部 剣を持たずペンで書いてみるだけの私のイスラム観

二〇一五年一月二十三日 起筆、擱筆、公開



《井筒俊彦》Thoha, Anis Malik, ed. (2010) *Japanese contribution to Islamic studies: the legacy of Toshihiko Izutsu interpreted.* IIUM Press, Kuala Lumpur.

宗教・宗教論については、メインブログでもたびたび書いてきているが、昨年の五月十五日に、この第二ブログで書いた「井筒俊彦生誕百周年」という記事を今読み返して見たところ、これが一番私のイスラム観の適度な概要の説明にもなっていると感じたので、も

う一度自分で自分のイスラム観を確認し直す意味も兼ねて、リンクしておこうと思う。

「井筒俊彦生誕百周年」

<https://iwasakijunichi.net/iwasaki-ningengaku-blog/96590029.html>

当然ながら、日本人の人質二名（後藤健二氏と湯川遥菜氏）の拘束のニュースに関連しての反応として、井筒俊彦や大川周明の著作や自分の記事を読み返してみたわけである。むしろ、こういうときにいつも考えてしまうのは、良し悪しは全く別にして、現地に赴くカメラマンやジャーナリストの関心の対象や自己の脳が欲している自己の行動と、宗教学・宗教論上の思案・思惟そのものに重点を置いてしまう自分のような人間のそれらとが、全く違うのだという点である。それは、敬意と違和感のどちらでもある。

ところで、イスラム国が目指しているとされる最大版図を見ても、西はイベリア半島、東はインドやウイグルの居住地域にまで至っているから、過去にイスラム勢力が一度でも征服したことのある土地全てを再征服することが目的のようだ。ナスル朝のグラナダ陥落によるレコンキスタ終結以前およびムガル帝国以前を版図の理想とし、いわゆるイギリスの「三枚舌外交」以前のオスマン帝国を統治体制の理想としているようである。

もっとも、昨年の私の記事は非常に言語論寄りで、イスラム教徒

の自己そのものやクルアーン・アラビア語そのものに対する日本人としての思惟の態度を示したものである。井筒俊彦の「言語アラヤ識」や大川周明の洞察眼とチョムスキーの「生成文法理論」との比較を主に書いていて、その上で、彼ら賢明な日本人が「SAE (Standard Average European ≡ 標準平均欧州言語) に基づく従来の優勢学的言語学」への反骨精神をクルアーン・アラビア語の中に見たという「予感」を、私自身が彼らの著作やクルアーンから感じたということ述べたものである。

私が、昨今の日本の店頭に並ぶビジネスマン向けの仏教書が語る仏教よりも、井筒俊彦や大川周明のイスラム観、あるいは彼らが出会ったイスラム教そのものを、自分の多神教的・仏教的あるいは神道的実存の仕方に近いものだと解釈する（いや、感じ取っている）態度は、決して偶然の産物ではなく、多分に論理的で平和的な態度であるという自負を、最近のイスラム過激派勢力の動向を見ていて改めて持った。

それにしても、井筒俊彦の愛弟子である五十嵐一氏が殺害された悪魔の詩訳者殺人事件のことが、今また個人的に気になっている。

第二部 「ISIS (イスラム国)」の呼称論争について思うこと

二〇一五年二月九日 起筆、擱筆、公開

昨日も Twitter で簡単につぶやいたのだが、ここ二週間ほど、日本では（特にネット上やイスラム学界・国内のモスクでは）、「イスラム国」の呼称を「イスラム国」・「IS」・「ISIS」・「ISIL」・「DAISH」などのうちのどれにするかで、かなりの論争が起きています。

その中でも、「イスラム国」は圧倒的に不人気のように、少なくともそれ以外の英語・アラビア語の略語で呼ぶべきだとする意見がほとんどである。日本政府は、すでに「ISIL」や「いわゆるイスラム国」と呼称することを明言している。

エジプト出身のファイイさんなどのタレントも、Twitter で、政府の言う通り「イスラム国」を「ISIL」に変えるよう結構厳しい口調で主張している。

こうして、過激派テロ組織について、それこそ過激な呼称論争が日本人どうしで勃発しているわけだが、これらの呼称は結局、どれも「国」と言っているのであり、呼称の調整がどこまで日本国民の誤解・イスラム教差別の防止や対日テロ対策として有意で実効的な試みかは不明だと思う。

そもそも、「IS」は「イスラム国」のことであり、「イスラム国」は「IS」のことなのだから、これは「言い換え」や「ニュアンスの変更」や「イスラム教差別の防止措置」ではなく、日本国内だけの「翻訳問題」や「略語問題」にすぎないのではないだろうか。

これらの呼称の中で、「イスラム国」という訳語を一番問題に感じ、イスラム教差別だと思うのは、日本語の分かる我々だけ（日本人や、日本語の分かる外国人・イスラム教関係者・ISIS 戦闘員だけ）であ

る、という点が盲点になりすぎている、といったISISに腹を立てているのか日本人どうしで腹を立て合っているのか、何だか分からないようになってきた。

元より、「イスラム国」と「イスラム国家・イスラム諸国」とを混同する日本人があまりに多すぎる（実際に混同しながら発言した被害者親族やコメンテーターがいる）という観点からも、呼称の調整必要論、訳語の廃止論が出ているのだと思うが、よく考えてみれば、これは言葉のせいではないと思う。

テレビやスマホで「イスラム国」という表記を初めて見たときに、「待てよ、そんな名前の国があったかな。イスラム国家ともイスラム諸国とも、何だか違うようだな。もしかして、そういう固有名詞を名乗る何らかの組織・集団かもしれない。調べてみよう」というくらいの注意力があつたかなかったかの問題で、政府や世の中が呼称を変えたところで、呼称の変更自体に気づくのもまた、そういう注意がある人だけなのだから、残念ながら、ほとんど不毛な議論ではないかと思っている。

「ISIS」と「ISIL」の違いは、最後に「al-Sham」か「the Levant」かの違いだが、私は一応、ブログでは、アメリカ政府や日本政府の「ISIL」ではなく、CNNなどの海外メディアの「ISIS」を使うことにしている。

また、「DAISH」 という語には、ISISが嫌悪するニュアンスが含まれており、実際にISIS側のメディア「フルカーン」もそう呼ぶなと反論しているが、どうやら組織の総意というわけではなく、単な

る一部の戦闘員の好みの問題のようで、「ISIS」・「ISIL」の穏健なニュアンスを大きく覆すには至っていないようである。
従って、

(1) 日本国内での呼称は、「イスラム国」・「ISIS」・「ISIL」・「DAISH」のいずれであろうが、どの過激派組織を指しているか、そして該当組織が国際犯罪組織であることが、国民の「知る権利」の範囲で分かっていればよい。

(2) 「イスラム国」と「イスラム国家・イスラム諸国」との区別が付かないのは、区別が付かない人自身の問題であり、日本の反政府系マスコミがISISの印象を良くし政府を批判するための策略として「イスラム国」の呼称を頑なに変えていないのだという説は、（そもそもこれが国内の翻訳問題や略語問題で、印象操作自体が不可能である以上）現時点では信憑性に欠けるようだ。

私が現在感じるところとしては、以上のようなことだ。
ところで、かつて私が学んだ山内昌之先生などは、「イスラム国ではない、イスラーム国だ」と怒っていらっしやるかもしれない。